

拙堂會報

第17号

2024年12月1日発行

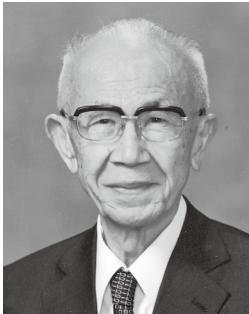
発行所

齋藤拙堂顕彰会

理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

拙堂の帝王学文書「献芹錄」	拙堂塾「幕末情勢と大砲鑄造」感想文
「折衷学派の人」	齊藤正和 1
太刀魚と秋刀魚	加藤龍宗 2
特別寄稿	飯田俊司 4
藤堂高虎公の生き方から見えるもの	拙堂塾野外講座 京都を訪ねて 7
椋本千江 5	短歌・俳句入選作品
	令和六年度下期の行事予定
	会員一覧

12	11	10	7	6
12	11	10	7	6



さて、この文書を読むと拙堂は幼君に対し、「帝王学」を易しい和語で説いている。約四千字ばかりの文書だが、その構成は最初に人君の職分は何かを説き、次いで主君は諫言を納れなければいけないと言う。次に人君の徳行は何であるかをあげる。最後に、国家を安泰・隆盛に導くには人君の孝行が最も重要だとして、その歴史上の事例を挙げ、それに習いなさいと説いている。

文政八年（一八二五）二月、拙堂の生涯の主君藤堂高猷公は十三歳で襲封。藩校講官の拙堂はこの幼君の侍読を兼務することになった。侍読の主な仕事は多分、経書を講義することだつたと思うが、その合間に人君たる者の心得を易しく話したようだ。その年の冬、それまでに話したことを短い文書にまとめて献上した。名付

けて『献芹錄』という。「献芹」とは野草である「せり」を献上するという意味で、人にものを贈るときの謙譲語である。

この文書を読むと拙堂は幼君に対し、「帝王学」を易しい和語で説いている。約四千字ばかりの文書だが、その構成は最初に人君の職分は何かを説き、次いで主君は諫言を納れなければいけないと言った。次に人君の徳行は何であるかをあげる。最後に、国家を安泰・隆盛に導くには人君の孝行が最も重要だとして、その歴史上の事例を挙げ、それに習いなさいと説いている。

複雑混迷の現在の国家情勢からみると何だか単純過ぎる感じがしないでもない。しかし、藩という国家に潰れる危険があったことは當時もいう。

次に、臣下の諫言はどんなにつまらないものでも聞く。家康は家臣池田久三郎が「お池の鯉」を食って諫めたのを怒らずに聞きいた話などを引いて説いている。

人君の徳行は孝行が最重要。家康は、自分への官位に先立ち祖父義重、父広重に対する没後の贈位を申請し、また、秀忠、家光たちは家康の命日には必ず廟に参拝し家康の功績をたたえる夜話を欠かさなかったという例を挙げている。なぜ孝行が重要か。人君は高い位置におり且つ富んでいる。高所に居るものには常に落下的危険が伴い、富は流れ去る心配がある。孝行とは傲慢にならないで上記の危険を回避することだという。奢る心をもたないで低い身分の者の言うことも無視せず必ず返事をする。常に、人君は生活に苦しむ人民のことを思い、自身儉約に努めることが肝要。それが何よりの孝行であると説くのである。孝行を「奢らない」ことと定義し、人君の戒めの第一を「孝行」即ち「奢らないこと」とする。故に拙堂の帝王学の眼目は「下々をいたわり、自身はおごらないこと」といえるのではなかろうか。



「折衷学派の人」

会長 加藤 龍宗



奉仕させて頂いている、天照大神（太陽を神とする自然神）を祭る神宮は日本の歴史と共に国の安泰を守る神様として二千年來伊勢の地に祭られ国民に崇敬されて来た、歴史に翻弄されたが、現在は一宗教法人として存在するが、多くの国民によって維持され、あの大自然に一步踏み入ると正に畏敬の念に心を清められる。本年は郷土三重が育んだ偉大な文人芭蕉の生誕三百八十年にあたるが併聖と讃えられた五十年の人生の中で六度も神宮に参詣している、なぜそこまで神宮を崇敬したのであろうか、そして次の句を詠んでいる。

何の木の 何の木の

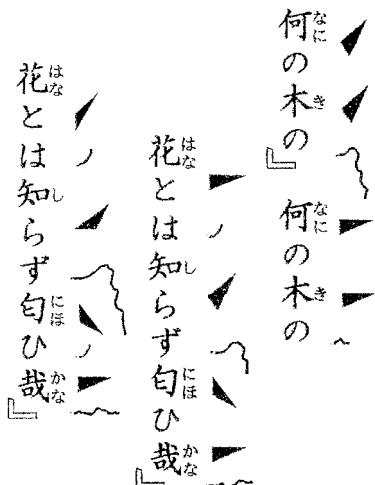
花とは 知らず匂ひ哉

礎に額突き魂に語りたる

父母の眠れる丘に帰れど

亡父八十年の年、千鳥ヶ淵靈園に参詣して

戦後七十九年目の熱い／＼夏も過ぎ、慰靈に注視し、明年生誕千百八十年を迎える菅原道真の原稿を書き終え、充実した日々を送ることが出来、ご先祖様に改めて感謝を捧げることが出来た。而し年初の能登大震災の復興が進まないことに政治家の怠慢、政治の貧困、責任の無さに怒りを覚えるのは私だけではないであろう、一日も早い回復を願わざにはおれない。さて小生は六十八年に亘り伊勢神宮に吟劍詩舞の奉納を



この句はそれよりおよそ五百年の昔、西行法師が七年間に及び伊勢の地に住い、神宮への尊崇の生活をし詠った歌に心を偲ばせたものである。

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなみだ
忝なさに涙こぼるる

何事の
西行

何事の『おはしますかは知らねども』

何事の『おはしますかは知らねども』
忝なさに涙こぼるる

西行の歌にせよ、芭蕉の句にせよ何んと伊勢神域を自然の聖地として心豊かにさせてくれる句歌ではないか。明治・大正・昭和と三代に文学史上多大の功績と万首に及ぶ歌を詠った佐佐木信綱は神宮への想いを次の様に詠い敬虔の誠を奉げている。

神路山初春の日のうららかに

五十鈴の流れ音さやさやに

神路山
佐佐木信綱

神路山『初春の日のうららかに』
五十鈴の流れ音さやさやに

千古の清流五十鈴川を詠い伊勢の大神への永遠の祈りを奉げている。

さて漢学者であつた拙堂はどの様に伊勢の神を見ていたのであらうか、著書の中では日本の国は天地精華の気が集るところであり上古の時代を「徳を崇ぶ世」と分類している、神代の歴史をどう見ていたかは不明であるが、伊勢の大神を「ひかり尊き日の神」と詠んでいることは自然神を神とし尊崇の念をいだいていたと思える、(和魂漢才)折衷学派の偉大な儒学者であった。

いつとも仰ぐものから今日さらには
ひかりたふとき日の神のかけ

斎藤拙堂

いつとも『仰ぐものから今日さらには
ひかりたふとき日の神のかけ』

いつとも『仰ぐものから今日さらには
ひかりたふとき日の神のかけ』

素晴らしい句歌を口づさみ心豊かな人生を生きようではないか、読者、会員の皆様の弥栄をご祈念申し上げます。



太刀魚と秋刀魚

理事長 飯田 俊司



んぶら、塩焼き、干物などで食べて美味しいところからシーズン中に何度も行く。

伊勢湾口の太刀魚釣りには秋刀魚（サンマ）の切り身を餌に使う。獲物も餌も「刀」という字が入っているのが面白い。近年は大阪湾や東京湾などで流行のテンヤという道具にイワシを付けて釣るやり方も増えている。

伊勢湾口の太刀魚（タチウオ）釣りのシーズンは八月中旬～十二月中旬なので、終盤に入つた。太刀魚は近年よく釣れるので人気のある釣りである。文字通り刀の形をしており、英語ではサーベルフィッシュと言つ。釣りあげた時、刀のようにはキラキラと銀色に輝く魚体は美しい。大きいのは百五十センチにもなり、ドラゴンと呼ばれるが、滅多矢鱈には釣れない。釣りを趣味とする私としてはこのドラゴンを釣りあげることが楽しみの一つである。

太刀魚釣りは合わせ（餌を食べに来た魚を針にかけるタイミング）が難しく技術を要すること、針にかけてから釣り上げるまでの引きが強いこと、下手をすると鋭い歯で仕掛けを切られてしまうスリルがあること、そして、刺身、て

環境の変化、特海水温の変動によって引き起こされることが多い。寒冷期にはスルメイカや秋刀魚などが豊漁だったが、海水温が上昇している今はマイワシやブリなどに代わっている。

地球温暖化が進む中、今後も魚種交代が起こるかは予想できない。早く太刀魚と秋刀魚の漁獲が増えることを期待している。

この秋刀魚の年間漁獲量が二〇〇八年には三四千トンあつたものが、二〇一二年には約一八千トンにまで減少している。秋の味覚として日本人に親しまれてきた秋刀魚も値段が高く、型が小さくて脂ものつていらない、売られていないこともある。今は太刀魚を食用に購入する気も起こらないが、釣り人は高くても小さくても手に入れなければならない。餌が手に入らず、止むなく釣り船の予約キャンセルということもあつた。

近年続く秋刀魚不漁の原因について、いろいろの研究がされているが、黒潮の大蛇行による三陸海岸の水温上昇、親潮の流れが弱くなつて北海道東岸にまで達しなくなつたことから秋刀魚の漁場が日本から離れたことが大きい。秋刀魚が小さいのも日本近海から離れた海岸では餌環境が悪いためである。また、近年中国、台湾の大型漁船による秋刀魚の乱獲も原因の一部と思われる。

数十年単位で特定の魚種の漁獲量が他の魚種に入れ替わる現象を「魚種交代」といい、海洋



特別寄稿

藤堂高虎公の生き方から
見えるもの

全国歴史研究会・三重歴史研究会・ときめき高虎会会員

椋本千江

藤堂高虎公は、①感謝する心（恩を忘れない、旗印丸餅三つの話）、②努力する人（築城の名人・和子姫の入内の手伝い）、③先見の目を持つ（のちに家康の家来となり、領地の保証のお墨付きをもらう）、④人々を大切にする（南禅寺山門の建立・伊勢街道の整備）等の優しく賢い人です。人生の羅針盤として家訓や遺訓を残し伝えています。これを見ると命の大切さ、人の思いやり、心構え、たしなみ、しつけのあり方など細かな部分まで述べられています。

家訓には「仁義礼智信があり、そのうちのどれ一つ欠けても成功しませんよ」と人の生き方が書かれています。仁=思いやり、義=道理、礼=礼儀、智=知恵、信=信頼の大切さです。

日本の教育の発展の為に朝鮮の儒学者姜沆に藤原惺窓、林羅山に儒学思想の基になる儒学を学ばせて、それにより湯島聖堂、昌平坂学問所が作られ、後の東京大学に発展させたのが高虎公です。この高虎の心の持ち方を徳川家康は絶大なる信頼をしています。これが今日の日本の教育思想へと繋がっています。高虎公のご詠歌に「友は只直なる人とむつましみ 偽りなきを道と知るべし」（意味 真の心で人と仲良くなり、心の底から付き合

える友人知人を持ちなさい。それが本当の道ですよ）とあり彼の人間性が解ります。

この高虎の心の在り方が子孫に繋がっており、津藩主第十四代高兌は益々良き文化藩にするには”人には教育が大切だ”として武士の子の為に、津に有造館、伊賀には崇広堂を建て、領民の子には寺小屋を建てています。人格を磨き心を養い、知識を得ることの人造りをし、中でも有造館三代目督学（校長）の齋藤拙堂は津藩の教育の充実、人材育成に力を入れています。十二名の生徒を長崎へ留学させており、柳橋悦は水路測量を、堀江鍊次郎は写真術を、村田佐十郎恒光は算術を学び、彼らを世に輩出しています。幕末の世の流れを見て国防論を唱えています。『士道要論』『拙堂文話』『月ヶ瀬記勝』等の著作を残しています。

このように良き藩には良き家臣があり共に国、藩を守ります。人の心は不变です。高虎公や高兌公のよつに人間の誠、人を愛する気持ちの持ち主は、人生のお手本として尊敬されて名を歴史に刻んでいくのでした。



拙堂塾「幕末情勢と大砲鋳造」感想文

令和六年八月二十五日

津市教育委員会 中村光司様のお話を伺つて

池田太一

この講演は歴史的な視点と技術的な視点の両面から幕末期の大砲製作を掘り下げ、日本の工業化について学ぶ貴重な機会となりました。歴史文化や技術に興味がある方々、日本人のもの造りの根底にある精神を理解する上で非常に興味深い内容と思料されます。

江戸後期幕府は欧米列強の脅威に対抗し防御力の強化を計りました。他に薩摩藩、佐賀藩、各々が近代産業の導入、船舶施設の増設、津藩は有造館、贊崎に台場を創設しています。

講演は幕末情勢と阿保家（屋号なべや）が製作した大砲に焦点を当て展開されました。同家は、江戸時代末期に、高い技術力を誇る鋳物師として有名で、大砲の製作に大きな役割を果しています。

同家を庇護した真継家は全国の鋳物師を統括する貴族で、朝廷への橋渡し役より鋳物師の統括と支配を行い、同家からの発給文書は灰色の再生紙の使用が特徴です。

菊文許状

阿保家は真継家を通じて朝廷と繋がり京都御所 清涼殿 再建に協力し、その為 藤堂藩主

が同家門前を通過する際は徒歩の逸話まで残ります。

講演中、阿保家が手掛けた大砲関係資料、例えれば臼砲等についての説明が印象的でした。近代化が進む中で、幕府が欧米の脅威に対抗する

ために大砲の製造を急いでいたこと、その要求に応えるため、いかに技術を駆使し、短期間で高性能な大砲を鋳造したのか語られました。大砲製造過程の工夫や、当時の限られた資源と技術の中で品質を保持し効率的に生産を行ったかの説明は、時代背景を理解する上で非常に有益でした。

当時の日本が直面していた国際情勢や、内外の脅威への危機感が大砲の製造を通じて伝わってきます。同家が製造した大砲は、単なる武器としての役割を超えて、当時の日本が直面していた困難な状況を開拓する象徴と思われます。おそらく同家は鋳物師の誇りを持ちつつ、国家安全を守る使命感に駆られていたと想像できます。

講演後の質疑応答では、現代における伝統技術の継承とその重要性についても触れられました。同家が海外の技術を導入し、後の日本の産業発展に多大な影響を与えたこと、遺した技術や創造精神を後世に伝える重要性を改めて認識しました。



拙堂塾野外講座

京都を訪ねて

大江多津子

京都の旅に参加して

誠にありがとうございました。
謝申し上げます。

残暑厳しき中にもどこか初秋の訪れを感じる旅となりました。鴨川ののどかな清流を銀鱗飛び弾ねる鮎、日傘を差す人が行き交ひ晩夏の景を醸し出しています。

鴨川添いの山紫水明処では朗々の献吟が響き山陽翁にも届いたのではないかと感じました。拙堂先生と書生さんが山陽の教えを乞い夜は美酒を酌み交い深まる京を楽しんでおられたのでしょうか。

相国寺六〇〇年寺領の広大な鎮けさ、義満との縁に浸り若仲・応挙の直筆の絵画・竜の天井画、茶器の名品、枯山水・石庭等歴史の一端を垣間見ることができました、ホテルでは昼食後俳句・短歌会があり皆さんの句・歌はあまり聞けなかつたのですが私の拙い句を先生方に吟じて頂き胸が熱くなりました、ありがとうございました。



拙堂も学びし書斎ちらん虫

秋澄むや琵琶湖疎水の滔々と

多津子

葉にも、秋を思い又レンガ造りの琵琶湖疎水は今も大地を潤している姿は圧巻でした。さがブレークをかけなかく俳句は出来無かつたのですが沢山の思い出を少しづつ句に残したいと思っております。

関係者の皆さん様の心尽くしの京の旅に厚く感謝いたします。

とにかく暑かつた

栗真恵光

父、私、長男の親子三代が、学生時代を過ごした京都は、我々家族にとって思い出深い場所です。何かにつけて京都を訪ねることは多いのですが、毎回プラス旧懐探しの旅でもあるのです。今回顕彰会のお世話で妻と共に参加させていただきましたが、何とメンバーの皆さんにご縁のある方、旧知の皆さが多く楽しい旅になりました。まずは、飯田理事長は、ご夫婦での散歩の途中に白坊の山門前をお通りになり、ご用事の際には時々お立ち寄りになるというご縁、安村常務理事、黒田女史、竹谷女史は中学校の同級生、志田さんは中高の先輩でもあり葛山さんと共にRC（ロータリークラブ）の嘗ての仲間、種田真山師は詩吟時代の先輩という、いろいろな思い出ご縁が交差する極めて思い出深い旅でした。

学生時代にも感じていましたが、京都の夏は頗る暑い！“鍋の底で炒められる様な”等と比喩する人もいる位の名高さがあります。山陽書斎の山紫水明処で、『題不識庵擊機山岡』を吟じ、滴り落ちる汗を小脇に抱えて喘ぐように鴨川に架かる橋の上に辿り着くと、川筋を渡り来き返った思いが致しました。そして、ふと蘇った

のが祇園祭の夜、鞍馬口の学友の下宿でサントリレッドを鯨飲し、酔いすぎて迷い込んだ鴨の河原のせせらぎに大の字に身を浸して天空の星を眺めていた記憶が甦って来、蹉跌と慚愧の酒飲み人生までが脳裏に浮かんできて冷汗が流れる思いが致しました。さわざりながら冷と暑を秤に懸けてみても、やっぱり京都は暑かった。



縁あって斎藤拙堂顕彰会に参加させて頂いて以来、月ヶ瀬、大垣、今回の京都の研修旅行と、旅行のみ夫婦で皆出席。

京都は、頼山陽の書斎山紫水明処、相国寺、南禅寺を巡る旅でした。往きのバスの中で、斎藤顧問より、頼山陽も拙堂も、漢文、書も優れているが本人達はケイセイガクシャのつもりだったと……。ケイセイガク？ナンじゃそれは、経世済民の経世か。そういえばめったに参加しない拙堂の勉強会で、拙堂は藩主に講義したり、津藩の藩士達を何名か長崎に留学させ勉強させたり、「海防五策」など国防を研究したりと様々な事をされたと学んだ事を思い出しました。幕末の動乱の時代に国を憂い、西洋の優れた所を恐れず取り入れ、経世済民を考えていたんだと改めて尊敬の念が湧きました。

一方で二人とも月ヶ瀬の梅林、鴨川、東山の風景を愛し、詩歌や酒を楽しむ人生だったのがスゴイと思いました。

山紫水明は山陽の造語で風景だけではなくて時刻も表すとの事、また幕末に建てられた山紫水明処の障子にガラス板が既に存在した事、相国寺開祖の夢窓疎石が安濃の出身など、私なりの知的好奇心を掻き立てられる旅でした。

山紫水明

佐々木 政彦

拙堂塾

畠山岳裕

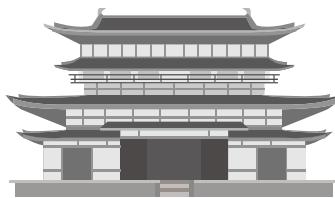
京都旅行に参加して

令和六年九月二十日（金）古都京都への旅行に参加させて頂きました。彼岸の入りを過ぎ、秋らしくなると思っていたところ、当日は真夏日となり朝から屋外では蒸暑い天候になりましたが、久しぶりに楽しく思い出に残る一日を過ごすことが出来ました。

特に以前から期待していました「頼山陽書斎、山紫水明処」は、今回が初めての見学であり大変感動しました。江戸時代末頃に建造された当時の書斎は、書斎の下の石垣を洗うようにして鴨川が流れ、対岸には柳が多く東山三十六峰を一望に眺め、大文字山、比叡山、聖護院の森も見えて、のどかな田園であり、風光明媚の代名詞になつたとの説明がありました。そこで何か当時を思い、一句出来ればと、思案しました。

昼食は、「ホテル平安の森京都」において、豪華な会席料理を頂き、暑さも忘れ堪能しました。昼食後の懇親の場では、車中で配られた俳句短歌募集作品の表彰とその作品の吟詠があり、吟者の一人として発表させて頂きました。知人は多くなく心配でしたが、バスや懇親の場での親睦も図れ、有名な古刹を巡る旅を経験でき感激しました。

最後に素晴らしい旅行を企画して頂きました役員、幹事様、並びに参加頂きました皆様にお礼申し上げます。



「山紫水明処」を訪ねて

細谷正吉

昨年の梁川星巖に次いで、今回は頼山陽を訪ねての旅でした。日頃、齋藤正和先生より拙堂が山陽に教えを乞いに上京した時のエピソード、そしてその後の交流について、文話の会の講義の中で累々お話を承りました。

そして、初めて山紫水明処の佇まいを拝見して、もっと学者らしい張り詰めた雰囲気を想像していたのですが、欄干越しには鴨川を見下ろし、遠方には東山三十六峰が眺望できて、正に開放的で自由に思いを廻らせる風情を感じました。漢詩漢文のみならず和歌や俳句の世界も味わえる京都ならではの文化が生まれたことを想像できました。

これを機会に山陽が山紫水明処で繰り広げた巾広い交友関係、そして山陽自身の生き様を知り、「日本外史」をはじめとする著述の狙いなどさらに詳しく追っかけてみないと



思います。また拙堂と山陽の立場の違いによる発想を考えて見るのも面白いと思います。



拙堂塾特別企画

短歌・俳句入選作品

鴨川の川風わたる山陽の

宇宙広がる侘びの小庵

先賢の愛でし流れの向こうには

今に昔の三十六峰

高田峰昭

秋風や鴨川歩く拙堂と

細谷正吉

鴨川の橋を行き交ふ秋日傘

種田真山

山陽の言葉と知りて

おどろきの山紫水明景色と時刻

佐々木とし子

大江多津子

山陽をしのびて詠う楊柳ゆれ

苔むす水のしたたり拙堂も

藤貴静扇

劍菱や川床で飲む山陽と

中西容聖

山陽の寓居たずねなつかしき

大和の昔しのばるるなり

佐々木政彦

鴨川に山陽屋敷彼岸花

畠山彦和



令和六年度下期の行事予定

行事予定

齋藤拙堂顕彰

第九回「俳句・短歌」の募集について

十月一日発行の津市広報で皆様にお知らせいたしますように第九回・齋藤拙堂顕彰「俳句・短歌」を募集しました。

応募期限は、令和六年十月一日(火)～令和六年十一月三十日(土)まで。

優秀作品は令和七年三月十六日(日)の第九回齋藤拙堂顕彰吟道大会で表彰し吟詠されます。賞は齋藤拙堂大賞・津市長賞・津市議会議長賞・津市教育長賞の四賞です。選者は、俳句は山崎満世理事、短歌は三芳公子で、それぞれ津市発行「津市民文化」の俳句・短歌欄の選を担当しております。

俳句・短歌担当 山崎満世理事

(0059-2555-2515)



齋藤拙堂顕彰

『第八回小中学生書道展』

令和七年二月二十八日(金)から三月二日(日)まで、津リージョンプラザ三階の生

活文化情報セン

タ(展示室)で、齋藤拙堂を顕彰する県下の小中学生書道展を開催します。

展示時間は午前十時から午後四時。最終日は正午まで。

応募要項

対象＝小学生・中学生の毛筆作品
作品の大きさ＝ハツ切り・縦形式のみ

課題＝小一・おしろ 小二・みどり

小三・せつどう 小四・紀行文
小五・有造館 小六・拙堂文詩

中一・紅白梅花 中二・茶磨山荘
中三・月瀬散策

書体＝小学生は楷書
中学生は楷書または行書

名前の書き方＝小学一、二年はひらがな
三年以上は漢字が望ましい。

学年の書き方＝小一～小六、又は一年～六年、

一人一点



齋藤拙堂顕彰第九回吟道大会

令和七年三月十六日(日)、津市吟劍詩舞道連盟主催・津市共催・齋藤拙堂顕彰会後援の第九回齋藤拙堂顕彰吟道大会が開催されます。

なお、当日「齋藤拙堂顕彰・俳句・短歌」の表彰式を行い、優秀作品が吟じられます。入場は無料。ご来場を歓迎します。

日時 令和七年三月十六日(日)

午前十一時三十分から四時三十分

場所 津市大門七十五

津セントラルパレス二階

中央公民館ホール

市議会議長賞・津市教育長賞等が贈られます。書道展担当 稲垣武嗣理事

(0059-2224-3670)

中学生は中一～中三。行書作品は名前も行書
応募期間は、令和六年十一月一日(月)から
令和七年一月十日(金)

優秀な作品には齋藤拙堂大賞・津市長賞・津
市議会議長賞・津市教育長賞等が贈られます。

表彰は令和七年三月二日(日)に行われます。

会報への「寄稿のお願い

会員の皆様、テーマ、内容・全く自由です。
是非ご寄稿下さい。
短歌・俳句もお待ちしています。

会員一覧

令和六年
十月三十一日現在

個人會昌

(順不同・敬称略)

株式会社百五総合研究所 伊藤印刷株式会社	二松学舎大学松葉学園	株式会社百五銀行	支部朋友会
公益社団法人日本吟道学院	水心会	三重交通株式会社	百五リース株式会社
公益社団法人日本詩吟学院	津岳風会	岡三証券株式会社津支店	株式会社刀根菓子館
百五証券株式会社	株式会社ZTV	株式会社百五カード	水洋流詩吟朗詠会
株式会社刀根菓子館	錦水流淡翠吟詠会	藤貴流三重扇和会	ミフジ株式会社
水洋流詩吟朗詠会	株式会社百五カード	藤貴流三重扇和会	ミフジ株式会社
錦水流淡翠吟詠会	株式会社百五カード	社会福祉法人三鈴会さくら	社会福祉法人三鈴会さくら
株式会社百五カード	藤貴流三重扇和会	保育園	株式会社ヘルシーファミリー

井村屋グループ株式会社
株式会社ゼニヤH・C
株式会社ヘリテッジホーム
デザイン

株式会社辻工務店
三重トヨペット株式会社
一般財団法人三重県環境
保全事業団

三重県高等学校国語教育
研究会

アルコ株式会社
有限会社コスモス
おぼろタオル株式会社
佐藤ライト工業株式会社
丸ノ内ビル管理株式会社
株式会社中部都市建築設計
事務所

株式会社マルヤス
株式会社アイケーディ
株式会社アルファ
株式会社松阪鉄工所
株式会社丸中産業
株式会社第一ビル
宗教法人善行寺

梅田 安春
浦田 康寛
大井 和人
大西 曜子
岡 美代
(竹村觀扇)
大倉邦太郎
小川 直紀
小川 真史
荻原くるみ
小野美智子
奥田 則子
海住 祯人
柏原 良
勝眞 千代
葛山 不
川合 恒三
加藤 俊平
河村ツタ子
川上 貢司

川西みどり 喜田木崎 北澤 嘉田志田 北澤
眞陽 勝子 木下浩二 嘉信 奉剣 弓子
和也 敬子 紀平 嘉信 奉剣 弓子
昭男 進 紀平 嘉信 奉剣 弓子
向坂 純 紀平 嘉信 奉剣 弓子
雲井 純 紀平 嘉信 奉剣 弓子
國分 一成 紀平 嘉信 奉剣 弓子
児玉 進 紀平 嘉信 奉剣 弓子
小林 彰 紀平 嘉信 奉剣 弓子
小林 貴虎 紀平 嘉信 奉剣 弓子
齋藤 正晃 紀平 嘉信 奉剣 弓子
齋藤 正人 紀平 嘉信 奉剣 弓子
齋藤 佐千子 紀平 嘉信 奉剣 弓子
齋藤 酒井 宏明 紀平 嘉信 奉剣 弓子
坂部 竜也 紀平 嘉信 奉剣 弓子
佐々木政彦 紀平 嘉信 奉剣 弓子
佐藤 新治 紀平 嘉信 奉剣 弓子
佐藤 真理 紀平 嘉信 奉剣 弓子
嶋田 行弘 紀平 嘉信 奉剣 弓子
嶋田 志田 紀平 嘉信 奉剣 弓子